



東京理科大学・野田キャンパスの新7号館

# 日本化学会 第100春季年会

化学が開く新たな扉。日本化学会の春季年会在3月22日から25日までの4日間、東京理科大学の野田キャンパス(千葉県野田市)で開催される。旧化学会と旧工業化学会の合同により現在の日本化学会が発足した1947年には第1回年会在東京と大阪で開かれた。その時々、化学の進展を後押ししてきた年會。春と秋の2回、年會を行った時期もあるが、今回の春季年會で100回目を迎える。発表件数は約5000件、参加人数は約8000人が見込まれ、新しい息吹を吹き込む準備が着々と進んでいる。そこで、日本化学会の川合眞紀会長(自然科学研究機構分子科学研究所長)と第100春季年會の井手本康実行委員長(東京理科大学教授・理工学部部長・理工学研究科長)に、これからの化学、そして年會への思いを話し合ってもらった。



川合 眞紀  
日本化学会会長  
(分子科学研究所長)

## 100回目を迎えた春季年會

**井手本** 川合先生とは、いろいろ年會でお会いする機会はあるのですが、ごあいさつ程度に止まっています。今回、じっくりとお話できるとも楽しみにしています。

**川合** その意味では本日はお久しぶりですね(笑)。私が日本化学会の会長をしている時に井手先生が実行委員長として東京理科大学の野田キャンパスで春季年會を開催されたのは、とても運命的な感じでした。

**井手本** 今回、第100春季年會を本学野田キャンパスで開催することになりました。年會(学術集会)ではアカデミアが中心の企画や、産業界が中心のプログラムがあります。私は日本化学会を継いでいく。その観点から日本化学会を多岐と、一番の魅力は特に産業界連携にしています。アドバンス・テクノロジ・プログラム(ATP)に代表されるプログラムで産業界の方が春季年會のものに寄与されているところが非常に大きい。春季年會でも産業界のバランスが取れているのではないのでしょうか。野田キャンパスは総合的なものがあります。セッション、プログラムの組み方を工夫して、自分の発表をしながらも、できるだけ他の発表が聴けるようにしたいと思っています。

**井手本** また、「中長期テーマ」プログラムでは分野融合の実現や設定した共通のテーマに向かっている議論や、非常にいい企画として定着しています。ATPは産業界が関わることに大きな意味があります。毎年、春季年會は国内の学術集会ではありますが、英語化(口頭発表、ポスター発表)を先駆的かつ積極的に進めています。これは海外から多くの参加者を呼び込めるだけでなく、学生や発表者の目線や言動、グローバル化の体験や訓練となりますので、とても価値があります。

**川合** ようやく、みなさんも春の季節感が出てきています。英語の発表があるという点に慣れてきたようです。ぜひ、招待者だけでなく、自らの意思で海外からも情報収集したい、キーパーソンに会いたいという春季年會のベネフィットですね。

**井手本** 春季年會ではアカデミアック・プログラム(ATP)を

# 来たれ野田へ 未来を照らす白熱の舞台

noda



理科大野田キャンパス、初めての年會開催

**井手本** 野田キャンパスは都心からのアクセスは良くないと感じられる方もおられるようですが、交通の便はよ、最寄り駅の蓮花駅から徒歩5分にあります。他地域の方面に比べて遠く感じられるようですが、そうでもないので、ぜひ足を運んでください。

**川合** また、野田キャンパスには本学前学長の藤嶋昭先生がセンター長を務める「光触媒国際研究センター」、火災などの科学的な解説でニュースなどでおなじみの「火災科学研究所」など、さまざまな研究施設があります。若手だけでなく、さまざまな化学や科学のことに伝わる場は私にもすばかと思っております。

**井手本** キャンパスツアーなども企画されていますね。

**川合** 専門学会は研究分野の近い人たちが集まっているので、初めはいいのですが、これは

**井手本** 意外な話ですね。そうなんです。大学として日本化学会の春季年會が開催されるのは初めてです。他の学術集会は数多くお引き受けしているのですが、日本化学会の春季年會のような大きな規模の実績はありません。本学のキャンパスは現在、神楽坂(東京都)・葛飾(同)・野田(千葉県)のほか、長万部(北海道)にあり、野田キャンパスしかない判断しました。野田キャンパスにある理工学部は理学系、工学系6学科の合計10学科、理系系単科大学である規模。2017年に創設50周年を迎えました。これを機に今後50年を見据えたビジョンを策定しました。掲げたキャッチフレーズは「REONANCE 自然・環境・宇宙を通して、共に響き合う理学部へ」です。各々の専門を深めながら、分野横断的な取り組みを目指しています。また、リサーチセンターを標榜し、今回の春季年會でお披露目することになった新しい7号館があります。これまで、建物に基本的な学術的機能は備わっていましたが、新たな横断型・融合型研究を推進する建物となっています。さびしいインテリジェントな会場と

**井手本** 化学を広く知ってもらうため、春季年會でも一般市民の方への公開講座などを行っていただくことをターゲットにするか、何かが作れる、応用を考えると、何かを作ることがありますが、反応式を覚えるだけで済むものは感じられません。ある意味で世の中は物質そのものであり、化学が担う役割が非常に重要です。化学には物理が必要で、逆に物理学の理論が化学を支えているとも言えます。化学はさらに広がる可能性を秘めています。化学自体も高まっているので、化学分野も高まっていると思います。この醍醐味を実感したのは大学に入って研究をはじめたからです。私の研究では自ら合成法を考えたり、創製したものは理論計算も取り入れた平均・局所構造解析や電子構造解析など自分たちの分析、解析手法を先駆的に取り入れて検討しています。

**川合** 毎夏に行っている化学クラブの活動の境界領域。化学は物理的、電気的な考え方も必要になります。これが化学の奥深さであり、新しい展開には化学分野の誰の何境、融合領域に敏感で、積極的に対応して、つないでいくのが重要ではないでしょうか。

**川合** ところで、日本化学会の重要なプレーヤーである産業界の会員の方たちにとって春季年會はどのような役割を担っているのでしょうか。ATPは企業の方を中心として企画されているプログラムです。多くの企業会員の皆さんが学術活動を含めて一所懸命に動いていることが承知しています。また、企業員がどれだけの年會に参加しているか、ということから目をそろしはならないと思います。つまり、企業会員の心算はどうかということですね。意外と異業種分野がキーワードになるかもしれません。もしもかすと、ATPに心を響かせるプログラムがあるかもしれませんね。

**井手本** やり、トピックス的なものを取り入れていくことではないでしょうか。電気化学会では電池討論会の参加者が本体の学術集会を上回っています。なぜかと言います。電池討論会は企業のみならずの参加者が多いからです。ここでは最新の情報やアイデアも企業も発表します。論文になる前の成果なども発信されており、学生の発表もクラスを上げた内容となっています。

**川合** 今回の春季年會は化学のテーマインテリジェント(学術)をテーマとして定着しています。ATPは産業界が関わることに大きな意味があります。毎年、春季年會は国内の学術集会ではありますが、英語化(口頭発表、ポスター発表)を先駆的かつ積極的に進めています。これは海外から多くの参加者を呼び込めるだけでなく、学生や発表者の目線や言動、グローバル化の体験や訓練となりますので、とても価値があります。

**井手本** 現在、私はリチウムイオン電池や次世代電池をはじめとする電池材料を主に研究を行っています。待たずに野田先生のノーベル賞、いつお取りになるかと思っています。私が実行委員長を務めるタイミング、そして100回目を迎える年會で野田先生の記念講演を企画できるのは何かを感じています。

**井手本** 野田先生は理化学博士号を取得されている。とても興味深くて、楽しいお話が聞けるのではないのでしょうか。私が両氏を仰慕する姿勢でつなげたいと思っています。

**川合** 機関誌「化学と工業」の論議委員会が企画される「フォーラム」の徹底討論は、とても興味深い企画です。今回の春季年會の目玉のひとつとして考えています。「超分子化学」の分野は、昨年の討論では十分なあり方、学生の就職のあり方などが語られました。今回はどのような議論が行われるでしょうか。

**井手本** 超分子化学は日本が世界を牽引している分野です。今回、年會として100回という節目であり、このタイミングで今年度の春季年會の目玉のひとつとして考えています。超分子化学「アジア会議」と銘打った国際シンポジウムを予定しています。東京大学の藤田誠生と名古屋大学の八島栄次先生に企画をお願いしています。なるべく他のセッション、プログラムと重ならないようにすべきなのですが、なかなかそうはできません。少なくとも公的な大きな行事は避けて、みなさんが足を運べるようにしたいと思っています。

**川合** 超分子化学は今後の活躍が期待される日中韓の若手研究者が活躍します。プログラムセッションを取り、これらに注目される日本の若い先方も企画に加えておきたいです。野田先生の活動に大いに期待を寄せておられます。野田先生は、中韓からも多くの超分子化学の研究者を入れていただけたと期待しております。

**井手本** 第100春季年會です。この大きなトピックスは必要です。超分子化学はそのひとつで、春季年會をお知らせするポスターでも強調しています。

**川合** 恒例の会長講演ですが、今回は「現在・過去・未来」をテーマに記念講演を行います。2001年のノーベル化学賞受賞者であり、日本化学会の元会長でもある科学技術振興機構(JST)・研究開発戦略センター長の野依良治先生(名古屋大学特別教授)と、当会次期会長であり、経済学博士の野依先生(名古屋大学特別教授)と、同会代表幹事も務められた「要ケカ」ルホールディングスの小林喜光会長にも

**井手本** 化学を広く知ってもらうため、春季年會でも一般市民の方への公開講座などを行っていただくことをターゲットにするか、何かが作れる、応用を考えると、何かを作ることがありますが、反応式を覚えるだけで済むものは感じられません。ある意味で世の中は物質そのものであり、化学が担う役割が非常に重要です。化学には物理が必要で、逆に物理学の理論が化学を支えているとも言えます。化学はさらに広がる可能性を秘めています。化学自体も高まっているので、化学分野も高まっていると思います。この醍醐味を実感したのは大学に入って研究をはじめたからです。私の研究では自ら合成法を考えたり、創製したものは理論計算も取り入れた平均・局所構造解析や電子構造解析など自分たちの分析、解析手法を先駆的に取り入れて検討しています。

**川合** 毎夏に行っている化学クラブの活動の境界領域。化学は物理的、電気的な考え方も必要になります。これが化学の奥深さであり、新しい展開には化学分野の誰の何境、融合領域に敏感で、積極的に対応して、つないでいくのが重要ではないでしょうか。

**川合** ところで、日本化学会の重要なプレーヤーである産業界の会員の方たちにとって春季年會はどのような役割を担っているのでしょうか。ATPは企業の方を中心として企画されているプログラムです。多くの企業会員の皆さんが学術活動を含めて一所懸命に動いていることが承知しています。また、企業員がどれだけの年會に参加しているか、ということから目をそろしはならないと思います。つまり、企業会員の心算はどうかということですね。意外と異業種分野がキーワードになるかもしれません。もしもかすと、ATPに心を響かせるプログラムがあるかもしれませんね。

**井手本** やり、トピックス的なものを取り入れていくことではないでしょうか。電気化学会では電池討論会の参加者が本体の学術集会を上回っています。なぜかと言います。電池討論会は企業のみならずの参加者が多いからです。ここでは最新の情報やアイデアも企業も発表します。論文になる前の成果なども発信されており、学生の発表もクラスを上げた内容となっています。

**川合** 今回の春季年會は化学のテーマインテリジェント(学術)をテーマとして定着しています。ATPは産業界が関わることに大きな意味があります。毎年、春季年會は国内の学術集会ではありますが、英語化(口頭発表、ポスター発表)を先駆的かつ積極的に進めています。これは海外から多くの参加者を呼び込めるだけでなく、学生や発表者の目線や言動、グローバル化の体験や訓練となりますので、とても価値があります。

**井手本** 現在、私はリチウムイオン電池や次世代電池をはじめとする電池材料を主に研究を行っています。待たずに野田先生のノーベル賞、いつお取りになるかと思っています。私が実行委員長を務めるタイミング、そして100回目を迎える年會で野田先生の記念講演を企画できるのは何かを感じています。

日本化学会 第100春季年會 3月22日(日)~25日(水) 東京理科大学 野田キャンパス

参加予約受付中

受付締め切り 2月19日

https://www.csj.jp/nenkai/100 haru/

【主催】公益社団法人 日本化学会  
【共催】東京理科大学